

## 「精神科医にこそ、精神疾患に対する壁や偏見がある」

大学教員 雨宮由紀枝

やっぱりそうなのかという複雑な思い。

「精神科医にこそ、精神疾患に対する壁や偏見がある」という指摘が頭を離れません。医師と患者と両方を経験された方の言葉であるだけに、ずっしりと響いてきました。

すぐに思い出したのは、檻に囲まれたナースステーション。鳥かごの中の看護師さんたちが、入院患者さんと檻越しに話をしている姿です。引き継ぎのミーティングは、「患者さんの性格や行動がどんなにヘンテコリンかを言い合う会」のよう。患者さんの様子を記録したカルテも然りです。

自分の知らないところで、こんな風に言われたらどんなに悲しいだろうかと、精神科ソーシャルワーカー（PSW）研修生の私は感じていました。

もうひとつ思い浮かべたのは、通勤途中の精神科病院の周りで見かける残念な風景。

時々、患者さんと病院スタッフが、歩きながら話しているのを見かけます。なぜわかるかというと、白衣を着たままだからです。面接室では話がはずまないのも外でも歩きながら、というのはわかります。着替える時間がない程忙しいかもしれません。でも、もしかしたら「私医療者、あなた患者さん」をアピールしたいから？ でしょうか。

自分がもしあのまま PSW になっていたら、たぶん職場の慣習を引き継いで、それが普通になっていたに違いありません。今いる職場だって、最初に受けたカルチャーショックはかなりのものでした。でも、今はあまり感じなくなっている。

危ない、危ない。閉鎖的な環境にいと、おかしいことを「おかしい」と気付けなくなっていくのでしょ。地域社会は多様性があるので、ひとつに偏る危険性は減る気がします。お医者さんたちも、地域に出てくるといいのになあ。自戒を込めて、多様な方々を知り、自分の差別や偏見について自覚し、常に正していく勇気と必要を感じています。

ご自身の壮絶な体験の数々は、私の心に深く突き刺さってきました。

お母さんが統合失調症だと打ち明けてくれた友人に、何もできなかったことを悔いています。もし自分の身に起きていたら。家族だったら。そして、今まさにその渦中にある多くの子ども達のことにも思いを馳せました。

辛い体験を打ち明けてくださり、本当にありがとうございます。夏苺先生の願いが届くよう、私も行動していきたいと思ひます。

『人は、人を浴びて人になる』を読んだとき、是非、著者の方に会いたいと思ひました。

私が願うと、いつか必ず、ゆきさんの講座で巡り会えます。

ゆきさん、いつもありがとうございます。